下町文化

第 197 号
平成10年8月15日
発 行
江東区教育委員会
生涯学習部生涯学習課

培われた"木彫"の世界

「工匠館」第5回特別展

岸本祐浩展
江戸木彫刻の精華
―深川に生きる後藤派の心と技―

工匠弐番館（森下文化センター内）では、8月29日から区指定文化財の木工（彫刻）・岸本忠雄さん（号：後藤祐浩）の作品展を「江戸木彫刻の精華」展と題して開催いたします。

岸本さんは、大正14年に深川で生まれました。祖父の庄吉氏は、明治の名人後藤工祐氏に師事、以来「深川の後藤」として祖父・父・忠雄さんと3代にわたって後藤派の技術を受け継いで来ました。「木と語り木を生かす」という気持ちで、彫りつづけて60年が経ちました。また、今年は祖父が独立し、深川（現在地）に店を構えてから120年でもあります。つまり、深川の後藤派にとって記念すべき年といえます。そんな記念すべき年ということもあり、後藤派の技術の粋を堪能していただくために、このたび江戸木彫刻の特別展を開催いたします。

江戸木彫刻は、伝統とハイカラの融合という一面をも兼ね備えており、日本の伝統と洋風彫刻の結合した技術ということもできます。そんな木彫刻の道を歩んで60年を迎える岸本さんは、まさに匠の技のもち主といえるでしょう。

今回、展示される作品は、つい立や彫字作品（多数）、丸彫の置物、仏像、面など多種類にわたる興味深いものばかりです。また、期間中に岸本さんの実演も行われる予定です。

期間　8月29日(土)～9月6日(日)
時間　午前9時～午後5時
（最終日6日は午後4時まで）
実演日程　8月29日(土)・30日(日)
会場　工匠弐番館（森下文化センター内、森下3―12―7）
入場無料
問合　生涯学習課文化財係
☎3647―9111
（内）3361～63

江東歴史紀行

砂村抱屋敷と毛利家のお姫さま

砂村抱屋敷

南砂の緑道公園にある大砲のモニュメントをご存じですか？

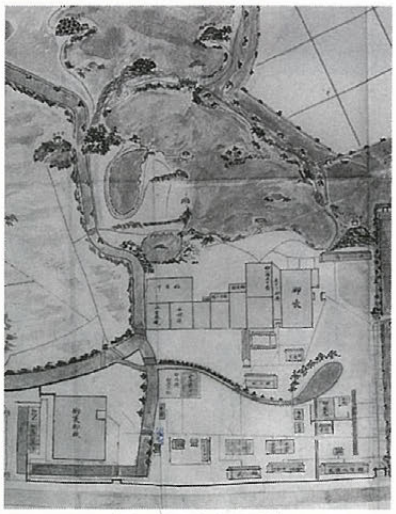
江戸時代、この辺りは萩藩毛利家の抱屋敷でした。嘉永年間（1848～54）には国許より鋳砲家を呼び寄せ、この抱屋敷内で大砲を鋳造していました。

毛利家がこの地を入手したのは、大砲鋳造より約60年ほど前の寛政2年（1790）のことです。その後一旦他家へ譲渡し、文政4年（1821）再び譲り受けました。同7年、藩主を退任した毛利斉熙（なりひろ）の隠居所にあてられました。山口県文書館所蔵の毛利家文庫の中に、この隠居所に関する史料がいくつか残されています。ここでは主に文政7年～天保7年（1824～36）の間の斉熙の身の回りのことや、隠居所に関する家臣の人事異動についての記録である『大殿様付諸沙汰控』と天保7年（1836）1月元旦から同9年10月9日までの、葛飾当役の日記『葛飾当役座日記』を中心に砂村の抱屋敷の様子と、砂村に移り住んだ毛利家の人々について見ていきたいと思います。

「葛飾御殿」の住人

文政7年、萩藩第10代目の藩主の座を退いた斉熙は、しばらく新橋の中屋敷に住んでいましたが、翌8年、砂村の抱屋敷を隠居所として移り住みます。当地を選んだ経緯については『大殿様付諸沙汰控』に記されています。それによれば、「御二方様並御子様方をも御一所に」と、正室・側室および次男信順（のぶゆき）（郷之助）・万寿姫・八重姫・安喜姫の4人の子供たちとも一緒に住みたいと言うのが希望であったようです。そのためには、ある程度の面積を有した屋敷が必要となり、検討の結果、新たに屋敷を購入するには費用が掛かるので無理でもあり、砂村は「風波之節御案も有之場所柄」でもあるが、それを防ぐための手段として、沖土手の外に二重の波除杭を設ける、建物と沖土手の間に大土手を巡らせ、建物の床を地上げする等の土木工事を施すことで、隠居所として使用されることになります。以後、この抱屋敷は「葛飾御殿」と呼ばれます。

翌年2月27日にまず斉熙が、翌28日にお姫様方と生母である側室が引き移っています。正室と信順は建物が手狭であるため、追々新築して一緒に住めるようにとしています。抱屋敷の面積は、文政7年の時点で砂村新田に一万七千七七〇坪、隣接する平井新田に四万三千八四四坪とあります。毛利家文庫にはこの時期の抱屋敷の絵図3点も残されており、広大な敷地と鴨場を備えた庭園の様子が窺い知れます。



葛飾邸図（山口県文書館蔵）

三人のお姫様

『葛飾当役座日記』は表向きの記録のため、奥向きのことについてはあまり触れられていませんが、その中から三人のお姫様のことについての記載を拾ってみました。

万寿姫は対馬藩主宗義章（よしあや）との縁談が決まり、天保7年（1836）正月、「葛飾御殿」から嫁ぎました。4月15日には「御里扱」として、両親の住む「葛飾御殿」へ里帰りをしています。この日、家臣は熨斗目・裃着用を仰せ付けられています。そして、万寿姫は夜九ツ時（12時）ごろまで「葛飾御殿」で過ごし、「松ノ御門」より六間堀の屋敷へ帰りました。

万寿姫のお輿入れと前後して、妹の八重姫が疱瘡にかかります。この時の見舞いの献上品などについては、それより先天保4年に安喜姫が疱瘡にかかった時のことを前例にしています。その他、上屋敷や国許への連絡、毎日の病状を老女に尋ねるなどが、葛飾当役の主な職務であったことが日記から窺えます。

また2月には、末娘の安喜姫が水痘にかかっています。この時も、先の八重姫が疱瘡に罹った時と同様に日々の様子を伺っています。

斉熙の死

天保7年春ごろより病気がちであった斉熙は5月14日に没します。これより後、正室は法鏡院、側室は玉温院という法名で記されます。斉熙の遺骸は木曽路・中国路を通り萩へ帰り、法鏡院・信順をはじめ、勤仕していた藩士も多く従って帰国しています。「葛飾御殿」には、八重姫と安喜姫、玉温院と「御姫様方、玉温院様方付」として若干の家臣が残されました。しかし、この日記の執筆者である当役の藩士は斉熙の遺骸とともに国許へ下っているので、こののちの「葛飾御殿」の様子は日記には顕れなくなります。残念ながらお姫様たちのその後の様子は知ることができませんが、毛利家の記録によれば、八重姫は毛利山城守元蕃（もとみつ）に嫁ぎ、安喜姫は駿河水野出羽守忠武に嫁ぎ、忠武卒後毛利讃岐守元純（もとずみ）に再嫁しています。

この広大な抱屋敷のあった土地は、昭和の始めごろまで毛利が原と呼ばれていたそうです。

（文化財主任専門員　向山　伸子）

江戸東京たてもの園で
伝統工芸の実演始まる！

「江戸東京たてもの園」は江戸東京博物館の分館として平成5年に開館し、文化的価値の高い歴史的建造物を移築して、復元・保存・公開をしています。今年の6月には中央区新富にあった木造3階建の看板建築家屋「植村邸」（昭和2年建築）が新たに公開されました。

これにあわせて工芸技術の公開を「植村邸」で行うことになり、東京都伝統工芸技術保存連合会（会長大岩仲治氏）加盟団体が交代で受け持つことになりました。

江東区は9月12日（土）及び13日（日）に刺繍（紋章）天野一政氏、染織（紋章上絵）石合信也氏二人の実演者を予定しています。

実演時間は午前10時から午後5時です。

◇江戸東京たてもの園
小金井市桜町3―7―1
☎0423―88―3300
開館は9月までは午前9時30分～午後5時30分（毎週月曜日休館）
観覧料一般300円

ここにも歴史があった

上の写真に写っている建物は、昭和30年ころの深川ミリオン座です。

深川ミリオン座は、深川富岡町1丁目（現・富岡1―10）にあった映画館です。当時は、「アラモの砦」「二十四の瞳」などが上映されていました。付近には、富岡八幡宮や深川不動堂、そして深川公園などがあり、人々が行楽で集まり、にぎわったことでしょう。

区内の映画館は、昭和12年ころは20館あり、戦災で打撃をうけましたが、昭和32年には17館が営業していました。深川ミリオン座の他には、辰巳武蔵野館、深川東映、千田シネマなどがありました。

この写真は、『江東区史』（昭和32年）を編さんする際に事務局が撮影したものです。娯楽のメッカであった映画館の様子を記録した貴重な一枚です。

古い写真、資料などを持っていらっしゃる方は、ぜひ文化財係までご連絡ください。

絶賛発売中

江東区の仏像	1500円
下町文化探訪	500円
おはなし江東区	1600円
牧野家文書5	1000円
文化財研究紀要9	700円

芭蕉記念館から
ジュニア俳句教室

日時　9月12日（土）午前9時30分
（集合9時20分）
会場　2階研修室
内容　俳句をつくってみよう
対象　区内在住の小学生30人（先着順）
費用　無料（筆記用具持参）
締切　開催日の前日
申込　窓口または電話で
◇芭蕉記念館
江東区常盤1―6―3
☎（3631）1448

工匠館（たくみのやかた）から
伝統の技　実演公開

毎月第一・第三日曜日に工匠壱番館（森下文化センター内）で行っています職人さんの今後の実演日程は次のとおりです。

9月6日　仕舞袴製作　杉浦　武雄

9月20日　提燈製作　杉田　礼二

＊時間はいずれも午後1時～3時

WANTED!! この人知りませんか？

―謎の「震災供養塔」をめぐって―

江東区では文化財の登録・指定の対象年限を昭和20年（1945）まで延長しました。そのため、大正・昭和戦前といった、ちょっと昔の文化財にも光が当てられることになります。このことは、その文化財に関係するご当人が、現在も生存中である可能性が非常に高いことを示しています。しかしこれは、関係情報が多い反面、調査に非常な手間ひまがかかるということも意味するわけです。今回はそうした資料を紹介しますので、是非情報をお寄せ下さい。

東陽3丁目沢海橋第二児童公園のなかに全長3㍍を超える石塔が建っています。正面には、剝離が激しいものの「大震災横死者供養塔」と陰刻がなされ、背面には「十三回忌昭和拾年九月一日」とあります。ここから、大正12年（1923）9月1日に発生した関東大震災の被害者十三回忌（1935年）の供養塔であることがわかります。

今から75年前の関東大震災は、空前の地震災害でしたが、なかでも地盤軟弱・人口過密の深川区（現在の江東区西半）は、日本橋区（現在の中央区）とともに東京市中最大の被害を被りました。被害状況は、資料や調査計算方法によりまちまちですが、焼失家屋4万9000戸（総戸数の90％）ともいいます。この年の10月5日には区主催の合同慰霊祭が平野浄心寺で挙行されました。

さて、皆さんに見ていただきたいのが、供養塔背面にある建立賛助員25名、8軒のリストです。

堀六太郎　池徳　辰巳屋　伊勢屋　森由　大平安　宇田川喜太郎　濱壽司　佐藤豆腐店　花福伊藤吉助　小宮丈作　中村定吉服部衛　梶屋文吉　栗山登一郎源田忠七　宮木三之助　土屋辰次郎　川島源十郎　小宮ハマ大澤由藏　石原はる　稲葉ナカ神田みき　小川利喜松　須藤亘啓　宮本うめ　大平のぶ　五月女るい　石川はつ　渡邊弥七米津はる

この人達は銘文から高野山金剛講員であったことがわかるのですが、罹災者のご遺族なのでしょうか。あるいは、近隣の人達で遺体処理などに協力された方々なのでしょうか。このうちお店については、私たちの聞き取り調査により、浜寿司は現在なく、大平安は自転車屋となっていることが判明しました。43年前のことですから、記載者がご健在かどうかは微妙ですが、ご家族がまだご近所にお住まいでも、既に次世代の方々が中心となっていることでしょう。

ところが、この供養塔をめぐってはさらに気になることがあります。1967年に発刊された『江東二十年史』には、震災供養塔が深川木場1丁目（現木場2丁目）の舟木橋に建っているというのです。しかし現在、舟木橋には確認できません。これが、先程の沢海橋の供養塔と同一のものであれば、舟木橋から沢海橋に移動したことになりますが、『二十年史』に載っている供養塔の寸法・銘文とは一致しません。一方、9年後の発刊になる『江東区の歴史』には、供養塔は木場2丁目の沢海橋にある、としていますが、こちらは単純に住所の方が誤りのようです。結局、舟木橋に震災供養塔はあったのでしょうか。そして現在は失われてしまったのでしょうか。あるいは、沢海橋とすべきところを舟木橋とした『二十年史』の単なる事実誤認なのでしょうか。謎は深まります。

今回紹介した震災供養塔や震災に関する文化財に関して、何かご存知のことはありませんか。地域の文化財をより深く理解するためには、皆さんからの貴重な情報が必要です。

是非文化財係までご一報下さい。